

私と天文学 [VI]

井深 大 (ソニー株式会社名誉会長)

アマチュア精神が科学を進めた

昔、反射望遠鏡を磨こうと思ったことがあります。写真の望遠レンズとして使ったらおもしろいと思ってね。私なりに考えるのは、星に興味を持つなどというのは、科学の最初の動機づけなんじゃないか。そういうアマチュア精神があって、科学はどんどん発達できたんじゃないか、ということです。あまり専門に固まってしまうと、うまくない。

他人のやるだろうことはやめておこう

戦争中のころ、それまで電気の会社は電気のことだけ、機械の会社は機械のことばかりやっていたのを、電気と機械の両方の特徴をうんと生かしたものを作ろうということで、日本測定器という会社を作ってもらって、そこで機械的なレゾナンスのQ値が非常に高いのを電気に応用するものを開発しました。例えば磁気の変化で出る磁石の振動の変化を電気信号にして検出する潜水艦探知機などです。そういうアイデアを、戦後、普通の用途に使おうと、いろいろなことをやってきたわけで、多分にアマチュア的ですな。

ソニーを興した時も、好奇心が旺盛でしたから、人の入っていない分野をやりたいかったわけです。当時は、ヤミ市で真空管買ってラジオを作りゃ食べていける時代でしたけど、そういう、他人がやるだろうことは絶対やめておこうじゃないかと、それがソニー創立の趣意でした。

プロデューサーに恵まれない日本人の独創性

日本も非常におもしろいことをちゃんとやっていたのですけれど、それを見出し育てることが大きく欠けていましたね。例えば当時東北大学の助教授だった植村君などは、独自に周波数変調や位相変調をやっていたけれど、だれも取り上げようとしなかった。でも戦後、ふたを開けてみたら、アメリカでは全部実用化されていたわけです。日本には、新しいものに対してこれはいいいい

う本質をつかまえて実際のものに応用する意志というのがなかった。よくオリジナリティがないと言われるけれど、どうも個人の問題じゃなく、それを束ねていくプロデューサーに独創性がないんじゃないかと思いますね。現在でも LSI 技術などは自分でイナージャを持ってものすごい勢いで進んでいるけれど、結局第5世代のコンピュータと言っても今の延長で考えているわけでしょう。全然別の考えから出発して、大転換をしなきゃ嘘じゃないかと思います。でも結局そういうものにぶつかって行く人は、なかなかいないですね。

天文学に期待する役割

私たちは宇宙の神秘というものをあまりにも知らずに済み過ぎていると思うのです。だから、自然の恐ろしさや自然の大きさというものから、我々が肌で感じるだけが世界じゃないんだということを、小さい子供や婦人にも知らせていただくという役割があるんじゃないですか。そのためにも、昔七夕様で年に1回牽牛と織姫が会おうと言ったような、何かそういうポピュライズする訴え方が、もっとあっていいと思いますね(談)。

◇ 6月の天文暦 ◇

日 時	記	事
2 7	天王星 衝	
5 21	芒 種 (太陽黄経 75°)	
7 2	上 弦	
7 20	最 近 月	
13 24	望	
16 8	金 星 外合	
20 19	火 星 留	
21 5	最 遠 月	
21 14	夏 至 (太陽黄経 90°)	
21 15	海王星 衝	
21 20	下 弦	
23 11	水 星 外合	
29 12	朔	
30 1	木 星 衝	

◇ 6月の日月惑星運行図 ◇

